



昭和45年(1970年)

7月号(No. 301)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

本文	
世界の屋根にベストをつくす.....	1
エベレスト隊本隊帰国.....	1
ディレンフルト.....	2
J・アレンからの手紙.....	2
谷地平生活.....	3
会員通信	
病床短信.....	3
マカール通信.....	4
図書室便り	
新刊図書受入報告.....	4
定期刊行物受入報告.....	4
洋書受入報告.....	4
地図受入報告.....	4
図書委員会報告.....	4
図書委員会懇信会.....	5
会務報告	
6月理事評議員会.....	5
昭和45年度各委員会名簿.....	6
ヒラリー卿来日日程案.....	6
婦人懇談会集報告.....	6
ルーム日誌.....	6
会員異動.....	6
新入会員.....	7
第259回小集.....	7
第260回小集.....	7
第24回ウェストン祭.....	7
海外委員会報告.....	7
訪日中華登山隊歓迎会.....	7

世界の屋根にベストをつくす

エベレスト登山隊帰国の途につく

成田君の事故報告以来すっかりご無沙汰いたしました。五月一日成田君の遺体をトックラでダビに付しました。

ペリジェの広い谷間から吹き上げる谷風に轟然と燃え上るほのお、パシパシとはじける薪の音、クンプ氷河にたちのぼる煙、それが成田の魂をエベレストの頂へ導いて行くようでした。

成田の死は私を初め、隊員には大変なショックでした。隊の行動も実質的には十日余も止まりました。私は成田のダビに立ち会って、もうよくよするまい、これからは成田の意志に従ってただ登山に専念しようという心を決しました。

ペース・キャンプに戻り、ただちに第三期計画、即ち東南稜からの登攀(五月四日―五月十三日)および南壁中央岩壁ルート工作の再検討を行なった。そして東南稜からの第一次登頂メソッドは五月十一日松浦、植村の二名(第二登は五月十二日二名(隊員とシェルバ))と決めた。折からの好天を利し

て極めて順調にキャンプを進め、サウスコルに登頂の拠点を五月八日に完了した。

作戦計画に登頂日を決する場合は、いまでも非常に重大なポイントであるが、今回は気象担当の長田隊長の予報が極めて精度が高く、BCにはいつて以来、われわれはこれを「長官の気象通報」と呼んで高く評価して、彼の予報から第一次登頂日を五月十一日、第二次を五月十二日と決定したわけですが、これが見事に当り両隊とも完べきの登頂を果たすことが出来た。

登頂の様子はすでにご承知のことと思うので割愛します。

昨五月二十一日隊員一同BCに集合し、危険なアイスフォールを背にし、もう山の危険はないといったホッとした気持ちで帰りの準備の前に休養しております。私の留守本部への通信も四月二十日以來一カ月余り絶えたわけですが、とにかく疲れ切ったBCに下っ

てきました。

南壁チームは藤田を頭に小西、中島加納、吉川、田村、嵯峨野、伊藤ら非常に張り切って取り組んでいましたが五月十日八〇五〇mに達した加納、嵯峨野のチームは山中落石に会い、加納は腰骨に負傷、また同日CIV七五〇〇m付近で行動中の中島寛は右膝に落石を受けるなどの事故があり、今春の南壁の状態からもうこれ以上登山を続けることは危険と判断したので南壁は断念することにしました。

ところが若い元氣な隊員は、落石は覚悟の上であると意気けんこうたるものがあつた。そこで南壁を断念するのは残念だ、もっと登ってみたいということで、二日撤収を手間取りました。青春をすべてこれに賭けた隊員にとっては、断腸の思いがあつたと思います。止むを得ないことでした。

東南稜パーティーは第一、第二次とも好天を利しての悠々たる余裕を示した登頂で、第三期計画は成否相半ばしたわけですが、

次の第四期計画は予定なら南壁の登頂パーティーを東南稜パーティーがサポートしながら頂上で会うというランデブー作戦でしたが、南壁を断念したいま

となつてはこれも実現不可能となつたので、再度サウスコルを中心とした八〇〇〇mの生活と、三隊同時トライの計画を練り直しました。一方食糧の方は三月二十三日BC入りして以来六十日間の登山行動の準備を行なっていた関係上五月二十日には登山打ち切り、BC下山という制限があつたので五月十九日を登頂日と決め、ただちに五月十三日から行動に移りました。そして五月十八日にスタンバイ完了し、十九日の天候を祈りました。

第三次登頂隊は田村、イラツエリン(CVI・八四五〇mから)第四次登頂小西、ビンジュ(CVのサウスコルから登頂)南面偵察パーティー、アイスクローアル経由でサウスコルに到達またはアイスクローアルから南面試登南峰まで、吉川、嵯峨野、伊藤の三名とした。

つまり南壁を断念した元氣なチームがこれに当り、五月十九日を期していっせいに三隊が行動しようとしたのであつた。またこれをサポートするメンバーは全員サウスコル到達という目標で渡部女史、報道、NHK野口カメラマン、毎日原田カメラマンもサポート中にサウスコルに到達しようという内

容でした。

この第四期計画は天候の周期が崩れモンスーンのような天候状況となり、遂に好天をつかむことなく、五月十八日第三登の隊はCVIから無念の涙をのんで下山CIVの小西、ビンジュもやれば出来るというのをこれた涙ながらのうちにABCに下ってきました。リーダーとしては下山を命じるのがまことに辛いことでしたが八八四八mの頂に達するということは容易ならざる業であることを痛感いたしました。

出来るだけのことはやりました。出るとしては悔しいつもりですがやはり三十九人の大世帯ともなかなかならずかし、意志の疎通を欠いたり、危険なアイス・フォールをはさんでBC・CI、そしてABC、それから南壁と東南稜隊と、不調の無縁を使って連絡ではなかなか大変でした。また高度馴化の問題とタクティックスの運用についてもドクターから厳しい進言があり、リーダーの判断とともに苦慮するところが大きかったです。(大塚博美)

ヒラリー卿歓迎パーティーのお知らせ

ヒラリー卿が七月下旬来日されるので七月三十日午後五時から如水会館(毎日新聞社裏)で歓迎会を開きます。会費千五百円。多数会員の参加をお願いします。

エベレスト隊本隊帰国

本会エベレスト隊大塚博美登攀隊長以下全員は現地に残る井上隊員を除き六月二十日午後十時四十五分羽田着の日機で、シェルバのチャレとビンジュを同伴し無事帰国した。

Günter Oskar DYHRENFURTH

(Nov. 12, 1886—)

吉沢一郎



ヨースのウオ
ーカー・スバ
ーやイエー
バハのアー
マゾン・フェ
ースをやっ
てくる男で、
Why do you
climb? に対
する答えは、
"A way of
reaching to
the essence
of existence"

深い人の筈であり、アメリカの登山企業家、ノーマン・G・ダイレンフラスの父親であることも知っている人は多いと思う。

G・O・D老は表題にも示してある通り一八八六年の生れであるから、今年は一八四才になる。ここで引き合いに出しては悪いが、横さんは一八九四年生れだから七六才、D老の方が八才年上である。だから横さんはまだわかれ

ギェンター・オスカール・ダイレンフルトと言えば、ヒマラヤに興味をもっている人、行ったことのある人、これから行くところとしている人には、とても関係の深い人である。

若い者の側にある訳になる。

D老からは今まで毎年「ヒマラヤ・クロニクル」を送って来てくれていたが、先日、最近「アルピニズムス」(トニー・ヒーパー)誌上に「世界の高峰」という題で一文を書くことになった。ついでには「山岳」(一九六一年)に出ていた伊藤久行隊の石原国利君撮影になるゴサインタンの写真が欲しい、という。

そこで早速私は両氏と高橋照君に連絡した。そして三氏の好意によって希望のものを入手し、二回に亘り飛行便でD老の許に届けた。

D老は大変喜んで、私の依頼した「フーズ・フー」と自分の写真を二枚送って来てくれた。以下、紹介するのはそれをもとにした略歴である。これは本人が書いたものだから最も信頼出来るよう。

最近、私のところにアメリカのクリス・ジョーンズ(Christopher A. G. Jones)から、日本の岩登りの一面についての質問が来たので、可なり長い返事と「山岳」からもらった写真を送った。これも大変喜ばれて、私のいつもの質問に快よく答えた手紙をくれた。彼は近代アメリカの岩登りを代表する一流登攀家の一人で、グランド・ジ

であった。これをどういう風に解釈するか、それは皆さんに委ねよう。

閑話でもないがこれは一応休題として又老に移ろう。因みに老は今、スイスはインターレーケンの北東四kmのところにあるリンケンベルクに住んでいる。ブリエンツェル湖の北岸にあり、グリンデルワルトへは直線にして南東一四kmに当る。

◇

生れは昔のプロシヤのプレスラウ(今はポーランドのヴロクラフ Wroclaw)。一九三三年にスイスへ帰化。地理学者、地質学者、ヒマラヤ探検家、山岳学者(Orologist)、文筆家、登山家。

(一八九五—一九〇四)

プレスラウで高等学校と専門学校。学士(Baccalaureat)号取得。

(一九〇四—一九〇九)

フライブルグ(Jim Breisgau)、ウィーン、プレスラウの各大学に学び、哲学博士号を得、且講師となる。

(一九〇九—一九一五)

スイス地質調査所共同研究者。

(一九一五—一九三三)

プレスラウ大学で、地質学及び古生物学の教授。国際ヒマラヤ遠行隊長(一九三〇)。

(一九三三—)

国際カラコルム遠行隊長。

(一九三六—)

オリンピック金メダル受賞(登山)。

(一九三九—一九五〇)

スイス・サン・ガル(St. Gall)で地理学教師。著書「〇種。科学及び山岳に関する論文、随想(二五〇以上)。

一九五〇年以來、ヒマラヤ及びカラコルムの記録制作。

英国、スイス、イタリア、オーストリア各山岳会の名誉会員。

ジョンサン峰(七四七三m)、シア・カンリー(七四二二m)、五〇〇〇—六

〇〇m級峰多数、アルプスの四〇〇〇m級六三峰。初登頂及び新ルート六〇峰。

多くの登山及び科学遠行隊の相談役。ブロックハウス百科事典、マウンテン・ワールド、アルピニズムス、ディ・アルペンその他の協力者。

(注) マウンテン・ワールドについて一言。これは一九四六年に「Berge der Welt」として発行されたが、一九五三年から英語版が出るようになり、最近刊行される「一九六八—一九九〇」版で、独英両版とも廃刊となることになった。別の形で何か出るようになると思うが、いずれにしろ使命は終わったとある。惜しいことだ。

喧嘩しないで!!

—J・アレンからの手紙—

今、来年度ヒマラヤ登山隊の一覽表有難うございました。それからアビ峰に関する地図や資料(山岳一)を破いて送った)をお返します。原因が損傷するといけないので、コピーしたのを一枚差上げます。

右の資料と「Sidney Wagnall」の書いた「Prisoner in Red Tibet」(彼は一九五五年にセティ河を遡って中共に捕えられました)を研究した結果、ナンパ峰への接近は Chantia 河をたどることにしました。

最近私は京都の佐藤京子方としてある鈴木さんから手紙をもらいました。彼女の語るところによると、小山貢と彼う人が、京都カラコルム遠行隊の隊長となってマルビティンへ行くそうです。その許可は得たということです。が、その期間は四月六月、但しルートはわからないとのこと。

私は又、オーストリア山岳会のカラコルム遠行隊(一九七〇)隊長、

◇ D老が自ら重要な著書としてあげているものは次の通り。

「Monographie der Engadiner Dolomiten」、「Alpine Geologie」、「Himalay-Unsere Expedition 1930」、「Dämon Himalaya」(1935)、「Baltoro」(1939)、「Himalaya-Fahrt」(1942)、「Zum Dritten Pol」(1952)、「Das Buch Vom Nanga Parbat」(1954)、「Das Buch Vom Kantsch」(1955)、「Mount Everest」(1959)、「Der Dritte Pol」(1960)、「Die höchsten Berge der Erde」in「Alpinismus」(1970……)。

(以上)

Edvard Koblmüller から手紙をもらいましたが、彼らも五月中旬—七月までのマルビティン登山を許可されたそうです。ギルギットからサスリだから私も南側ルートです。

私のところにもう六八年の報告書がなくなってしまったので、別の写真と地図を送ってやりました。

ついでに貴殿から京都隊へ、オーストリア隊の行くことと、両方がぶつかって喧嘩にならないよう、よろしく願います。

その登山隊が戻って来たら、入手された情報なり、同隊の報告書をお送り下す。

Manchester Nepalese Expedition, 1970, 13th, April, 1970—

John Allen

(吉沢宛)

(注) この隊長は一九六八年にマルビティンを南側から攻めて失敗、仲間一人が滑落して死亡した。遺骸は状況が危険なのでそのままにして帰ったらしい。A J 六九年にもその詳細が出てくる。

(吉沢)

谷地平生活

名須川 浩

五月十三日から十八日まで六日間を、吾妻山の谷地平小屋に滞在して、周囲の山に登り、心ゆくまで五月の山を味わってきました。

五月には珍しい悪天候続きも、谷地平小屋に入るまえに、高湯温泉に二泊、吾妻小屋に四泊してねばっている間に、十一日の晴天を迎えたのですが、野口末延さんのお口添えで約束しておいた荷あげ要員が、日程順延のために都合がつかなくなり、急に吾妻小屋の主人二階堂氏に半日都合を繰合わせて貰って、谷地平への途中まで荷物の半分を運搬するといやくりや、苦勞を重ねて、漸く小屋に入りました。

姥が原から谷地平への斜面にかかる夏道は完全に雪の下に埋れて春なお浅い感じ。谷地平小屋は無人で鉄骨平家建、床スレート張り、ドアが壊れていたのと、焚物が少なく日が沈むと相当冷え込みます。毎朝水が張りまじ。

滞在中快晴が三日続きました。一日は中吾妻山に、一日は東大嶺に登りました。今年は雪が多いので夏スキーも楽しむ計画はありました。

中吾妻山へは大体の方向は夏道によりましたが、夏道よりも鈍角なジグザグに急勾配にとり、スキーは背負い、アイゼンは携帯しましたが、使用せず登山靴のまま登りました。頂上の近くで尾根が狭くブッシュで雪庇が背中合せて東の谷に向って口を開け、歩きにくい個所がありました。頂上も木やブッシュがあつて眺望ほしいままではありませんが場所を選んで眺めました。帰りは頂上でスキーを履き直滑降から雪庇下を斜滑降とばし、以下の

スロープも大体は左山の斜滑降の連続で大しらびその森林を味わいながら、大倉川べりまで滑降しました。

東大嶺に登ったときも、頂上でスキーを履き南東に広大な斜面をスロープを画いて、頂上と一八四〇mの瘤との鞍部近くから雪で埋まった大倉川本流へ滑り込み、谷地平までの道のりの半分位まで下って水の流れが現れだし、雪橋を渡るようになってから、沢通しを避けて、左岸の台地状に続く森林帯に逃れ直滑降を繰返しながら、スキーを脱ぐこともなく、大倉深沢（五色沼に脱ぐ）べりまで降りました。

夕方から朝までは相当冷え込んでも流石に春で、湿原には露のとも芽を出し、鶯が早朝から日暮れ時までひっきりなしに啼いています。登山者が小屋に立寄ったのが一日だけ、快晴の山でも、小屋の夜も、常に人気のない静寂に浸ってきました。

いろいろな地図ができており、ちがいのあったりして却って迷いましたので、小屋の位置や渡渉についてつけ加えますが、谷地平小屋は姥沢（東吾妻山北面の水を集めて谷地平へ）と前大嶺の瘤（一、九〇〇m）からくる沢との合流点左岸にあります。積雪期に姥が原から下る場合は、この二つの間の尾根を横切らなければならない。尾根が緩傾斜になるにつれて尾根の上を合流点まで下り姥沢を左岸に越すと小屋の前です。小屋前の合流点から左岸を五〇m位下った地点で対岸に沢を越え、二〇m位登った台地に谷地平湿原が展開します。中吾妻山へは湿原の手前を西に大倉川に出たところで渡渉しますがここは渡渉は、午後の雪融け増水時で除まて濡れる程度でした。しかし往路としては早朝のことでもあり、渡渉を避けて、大倉川が谷地平北端で二つに分かれた地点で、大倉深沢と大倉本沢とを別々に越えて、前の大倉川

渡渉地点対岸に迂回しました。時間はいかかりますが靴を濡らす程度でよし、大倉川右岸は一面の雪原で歩きよいです。

私としては、昔、吾妻山に山小屋が何もなく頃頃の春三月、一切経の硫黄製錬所小舎を根拠として、東吾妻や家形山に一週間計りスキーツアーを楽しんだことがありますので四十二年振りの吾妻です。吾妻も開けて随分変わりましたが、期待した通り、谷地平や、中吾妻山には昔ながらの吾妻を見出し、楽しかった回想に耽っていると

(四十五年五月二十四日)

会員通信

病床短信

佐藤隆太郎

会の多年の計画もここに実を結び、今回のヒマラヤ行が大成功を納めたるは、お互いにご同慶の至りであります。今日までの諸先輩のご配慮こそと存じます。天下の注視の下に行なわれた世界最高峰の遠征も完全に目的を達し、その壮挙実にもたのしく有難く、また会員諸兄もご満足のことと存じます。

松方隊長はもとより総務役の松田雄一兄のご腐心もさこそと拝察いたし、特に感謝を捧げたいと存じます。またこれまでの用意万端お取計らい下されし三田会長はじめ会の皆さん方の苦勞にも満腔の感謝を捧げたいと存じます。

小生まったく病弱、魔人となり一度も集まりに出られず、ただわずかに毎日新聞の記事と「山」とにて知るだけです。三田さんとは大正九年はじめて穂高行のとき、徳本峠の茶屋にて知り

好評発売中

日本山嶽志

複製版

《付録II 越後の旦那様》

高頭式編集・日本山岳会複製協力

キク判 本冊 二四〇〇頁
付録 三〇〇〇頁

定価 四八〇〇円

山岳各記(全国二一九四山)

山岳表
主要山岳地図(四色)

登山術

山岳諸説

地質構造概論
山岳噴火年表主要山岳写真
各種索引

日本山岳界のバイブル

二、に再現成る!

登山家や旅行者のために名勝旧跡は勿論、山勢・位置・周囲・登路・標高・里程・眺望・溪流・滝・宿泊所や飲用水の有無から樹林草木の様子、更に文章詩歌俳句・伝説・絵や写真を入れ、専門家には動植物・気象・地質に至るまで詳述。

◇日本山岳会の生みの親である新潟県長岡の高頭翁が、全財産を投げ打って明治39年に発行した本書は、山のバイブルとして、今なお多くの人々に愛読されている。

◇原本の少ない現在、その複製版の発行が望まれていたが、要望に応えて、日本山岳会と野島出版は、この名著を全く同じに複製した。

◇著者の「人となり」や業績、著書の価値や意義について、あらゆる角度から浮き彫りにした。付録の「越後の旦那様」は、日本山岳会の会員各位により執筆編集されたもの。

★全国有名書店又は直接弊社へご注文下さい★

発行所 株式 野島出版

新潟県三条市一ノ木戸一九四七
【電話】三条(〇二五六三)③〇五二(代)
【振替口座】新潟 三四番

合い、——当時上高地バスはなし、三田さんはまだ大学生だったように思います、——親交をいただき今日に及びました。

近く有志閑談会のご通知をいただきましたが、年次晩餐会は大きくなりすぎました。むかし虎の門に事務所のあったところ高頭会長、また世話役は穂高で行方不明になった末木画伯に非常にご厄介になりました。会場は晩翠軒、中国料理でした。三十余名の小集会で大正から昭和のはじめにかけての集まりは楽しみでありました。当時の味が忘れられず、神谷さん方のご尽力で閑談会がいまなおつづけられることと存じます。

夏になりました。本年は皆様いづれの方面にご健歩を延すことか、切に楽しい旅をお祈り申し上げます。

医者通いも思うにまかせず、甚だ哀れなものになり面目ありません。切にご健康を祈ります。(五月二十四日)

マカルー通信

川口洋之介

四月二十九日(ベースにて)
マカルー通信の間が大分途切れて申訳ありません。A.Bより上でルートエ作やらハイ・キャン・建設の忙しさに紛れて、つい通信を怠りました。いったんB.Cに下って見て、ジャイアントの大きさに感慨を深めております。

実は金坂さんは覚えておられるかどうか。昨年デオチバより帰った直後、池田さんや神崎さんとお宅を訪れ、サントリー・オールドを御馳走になりましたね(B.Cでは酒は貴重です。そのとき帰国直後の若干の興奮と生意気にもデオチバの感想として「僕は六千mむきじゃないですね。やはりヒマラヤなら八千mむきです」とほざいたものですが……もしそのことを覚えてお

られるなら、今すぐに打消したい気持ちと恥かしさで一杯です。

遠征は日本を出たら半分成功というのは、六千m峰や七千m峰のことで、小生に石坂さんがいみじくも言われた「川口よ、八千m峰では八千を越えたところから九〇%の勝負だよ」という言葉が印象的です。

ところでマカルーその後の様子をお伝えしますと、尾上君はA.B(六五〇〇m)までルートエに行き、血行障害を起こしてダウン。難しい病気で、暑い所でも手足の指が冷たくなってしまふそう、上部ではビッケルが握れなくなるほど、彼はもっぱらB.Cより指令や機を飛ばす役目に徹しております。原登攀隊長の補佐役といったところ。

私の方はというと、最初B.C入り(四月二十二日)した頃から半月ほどは高度障害(そんはずではなかったのですが)と、生れて初めての痔で悩まされ、調子が出なかったのですが、このところC.Iで三日ほど休養し、食べに食べてようやく本来の調子に戻りました。

マカルーの東南稜はA.Bまでが中程度の氷河。二本爪で登りおりにあります。A.Bから上部の稜は、風があるだけにエベレスト南壁より難しい、とサードのミンマ・ツェリンはいつております。

すでに三千m余のフィックスをベタ張りで、ユマールを使用している登攀が続いております。ところがブラック・ジャンダルムというチンネのような岩峰がありまして、上部に行くほど難しくなり、さすがにジャン・フランコがさじを投げた後だけのことはあります。是が非でもこれを越し、成功させたいと思っています。

三日前、二日連続でO₂を使用したのですが、小生と市川氏が最初でした。

O₂なしで困難な登攀は無理ということがよくわかってはいます。ポスト・ランナーが待っていますので、これで失礼します。(金坂宛)

図書室便り

昭45・5

新刊図書受入報告

あすの書房寄贈

- (1) 高瀬重雄著『入山術』昭・45
- (2) 兵庫県山岳連盟寄贈
- (3) 宮崎辰雄編『アラスカの処女峰——Mount Kobe——』(1967年日米合同アラスカ登山隊報告書) 昭・45
- (4) あかね書房寄贈
- (5) 『大島亮吉全集 4—研究・論叢・翻訳、記録—』昭・45

藤島敏男氏寄贈

- (1) 藤島敏男著『山に忘れたパイプ』昭・45
- (2) 若菜堂刊
- (3) 定期刊行物受入報告
- (4) 『部報・全報類』
- (5) (山民民俗の会「あしなな」) 昭120号
- (6) (45-3)
- (7) 兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 36 (45-5)
- (8) 八王子海外登山研究会『海外登山研究』No. 2 (70-5)
- (9) 国立公園協会『国立公園』No. 245, 246 (70-4, 5)
- (10) 京都山岳会『京都山岳』No. 54 (70-5)
- (11) 京都中体連ワンダーフォーゲル委員会『行事記録』No. 8 (1969) (入我良房氏寄贈)
- (12) 『名古屋山岳会 月報』No. 21 (70-3)
- (13) 『日本大学山岳部 時報』No. 106 (70-5)
- (14) 奥多摩山岳会『OMCレポート』No. 246 (70-5)
- (15) 東京野歩路会『山嶺』No. 481 (45-5)

(11) 『登歩溪流会 会報』70-No. 2/4 (45-4)

(12) 日本山岳会東海支会『東海支会報』No. 8 (70-3)

(13) 日本登山協会『山と雪』No. 145 (45-5)

(14) 『全国高体連登山部報』No. 13 (45-4)

(15) 『雑記』

(1) 『山と雪』No. 147 (70-5)

(2) 『地図』No. 29 (45-3)

(3) 『登山』No. 276 (70-6)

(4) 『登山別冊』No. 10 日本山と雪 (70-5)

(5) 『HIKER』No. 176 (70-6)

(6) 『山と雪』No. 381 (70-6)

(7) 『その他』

(1) 大山山岳部『ハニタ登山計画書』70年9-11月

(2) 佐々保雄著『美しい日本は世界の宝——シムラ・タラに学んだこと——』(婦人の友) 1970-5 (抜粋)

(3) 石黒清蔵氏碑建設委員会『剣嶽に生ある——石黒清蔵の遺稿と追憶——』(1970-5)

(4) 寄書受入雑誌

(1) David Robertson "George Mallory", London, Faber & Faber, 1969. (丸善より購入)

Journals Arrived in May 1970

1. "Die Alpen", No. 4, April 1970.

2. "Alpinismus", 70-4.

3. "Appalachia bulletin", Vol. 36, No. 3, 4 & 5, March, April 1970.

4. "Der Bergsteiger", Jahrgang 37, Heft 4, April 1970.

5. "Deutscher Alpenverein", Jahrgang 22, Heft 2, März/April 1970.

8. "The Nepalese Perspective", Vol. VI, No. 27, 28, 29 & 31, March-May 1970.

9. "Österreichische Alpenzeitung", Jahrgang 87, Folge 1369, Jan./Feb. 1970.

10. "Panorama of Slovakia", '69-10, 70-1.

11. "Rivista mensile", Anno 91, Nu. 2, Febbraio 1970.

12. "Wandern & Bergsteigen", Jahrgang 22, Heft 1 & 2, Januar/Februar & März/April 1970.

寄国受入雑誌

1. "Abi Gamin", 1: 150,000. Schweizerischen Stiftung für Alpine Forschungen, 1961.

2. "Hispar-Biafo Glacier Regions (Karakoram Himalaya)", 1: 243,440. Royal Geographic Society, 1950.

3. "Cordillera Blanca", 1: 200,000. Österreichischer Alpenverein Verwaltungsausschuss.

4. "Mount Sidley", 1: 250,000. U.S. Geological Survey, 1963.

5. "Ross Island", 1: 250,000. U.S. Geological Survey, 1965.

6. "Thiel Mountains", 1: 250,000. U.S. Geological Survey, 1963.

7. "Vinson Massif", 1: 250,000. U.S. Geological Survey, 1962.

8. "Mauna Loa (Hawaii)", 1: 62,500. U.S. Geological Survey, 1964.

9. "Westland and Mount Cook National Parks", 1: 100,000. Department of Lands & Survey N.Z., 1964.

(以上丸善より購入)

図書委員会報告

五月十九日 午後七時 図書室

川上 野上 大橋 武田 岩淵 村

石、稲田

(1) 丸善において『第2回世界の山岳—地図と本即売展』が催され、受入報告に掲載した地図九葉、本一冊を購入する。

(2) 谷川岳『国鉄山の家』で、五月三十一—三十一両日、委員懇親会を開催する。

(P・S・12)

皇居もボリウムある緑でおおわれ、いよいよ東京の夏の到来です。エベレスト隊も、無事帰途についた模様です。安心です。現地では、東京では想像もつかないような様々な困難があったことと思いますが、今はヒマラヤ焼けの顔を全員羽田にそろえて元気に帰国するのを祈ります。

(東)

図書委員会懇親会

図書委員会では前々から谷川岳の高波吾策さんの『国鉄土橋山の家』で懇親会を行ないたいと話しに出ていたが、五月三十日と三十一日の二日間、楽しい会合と逢時の登山を行なった。当日は上野駅発十三時十五分発の長岡行の電車に乗った。途中桶川駅では急行に三本もぬかれるという具合であったが、普通の山行とちがい、われわれものんびりとまわっていたので鈍行もなかなかつなものである。車中では山崎さんは会報『山』のゲラ刷りの校正とあひな。高崎駅では八高線を利用してきた村石、松村委員も加わり、水上駅では後の急行電車でおおきく深田さんや、佐々木、東、平井の事務局の三人のお嬢さん達も乗車し、大方顔ぶれは集まった。電車は水上駅をすぎるとほとんどトンネルで、まるで東京で地下鉄に乗っているような錯覚をした。やがて長い清水トンネルを外に出ると静かな山中の土橋駅に

到着した。駅のすぐ裏手の山ノ家に行ったが、庭先で私達を出むかえたのは、ヒゲの吾策さんではなく、生後六か月の小娘と大きな犬であった。あの愛敬のあるヒゲをなぞって、吾策さんが、やあやあといって出て来て、あいさつされ、室内に案内された。そしてまず一席土橋登山学校の校長先生として山菜学の講義があり、そのあと男性達はその上の室でウィスキーで第一ラウンドを始めた。女子は山の家附近にて山菜取りに興じた。

七時からは食堂の、テーブルいっぱいにならべられた山菜を前に席に全員ついた。吾策さんが山菜の名をいろいろとおしえてくれるのだが、あまりたくさんあるの私にはさっぱりおぼえきれぬ。ヤカンで地酒をわかし、岩魚をつまみ湯のみ茶わんで酒を飲み、大いに食べ、歌った。吾策さんもメートルが上がつて来た所で、トルコ帽のような変な帽子をかぶり大変なさざわとなった。まさに土橋の夜は大供養である。特別参加の雁部委員の奥方は音楽の先生とのことで、ドイツ民謡の「菩提樹」を始めとして原語で何曲か歌われたが、それに合わせて図書委員もいっしょに歌ってそのなにはビックリした。図書委員がそんなにはドイツ語が出来るとは今までは思っていたいながら、皆口をあわせて歌っている様子であるので、さすがJACCの図書委員であると思いがち、私にはどうも聞きなれないドイツ語が多かったようである。

同宿している登山客もあるので、十時もし過ぎたので三階の室に入って今度は第三ラウンドとなった。今度はわれわれが吾策校長にととうと講義を始めた。その毒舌にはまいったのか途中で「チョット、チョット、トイレ」と云ってそれ以後は吾策さんは現われなかった。

翌朝は天気もよく、予定の逢時越えである。吾策さんは途中まで私達をジープで送って下さったというのです。すでにジープの用意をしてくれていた。朝食も山菜で用意された。ジープにギューギューと乗ったが、途中山道がデコボコで、車の中は昨夜のさわぎのようにひどい状態であり、私は乗る時最後に乗ったので、ジープの鉄棒に両手でブラさされたといった状態で、終点で降りた時は私は手の皮がむけていた。ここで吾策さんと別かれて大橋委員をリーダーに歩きだした。急坂となってきた二日酔いでもおかしいという女性も現われたが、すみきった青空、新緑の樹間をこぼれる太陽を身に受けて歩きながら気持ちよかったです。そして雪どけの水のおいしかったこと、こぶしの花、イワカガミの花々に見えながら十二時ごろ逢時に立った。越後側の残雪の山々をながめながら草地で昼食をとった。

土合側にまもなく下山、途中雪後ではシリセドを大いに楽しみ、ヘビのおでむかえが何度もあり、女性達はビックリしたり、名のしれぬ花に適當な名前をつけたたりして、つつじの咲く山道を湯掛谷川の河原まで降りた。土合近くで一ノ倉の出合まで登ったが、最近の一ノ倉、マチガ沢の出合附近を張つた所には驚かされた。昔テントを張つた所はコンクリートの橋となり、土合より一ノ倉の出合まで道路は舗装されておき、自動車道がドンドン入ってきて一ノ倉倉見物の人々の多いことである。時代の流れなのか、昔の谷川岳を知る人々は複雑な気持ちで、土合に下る途中の自動車道路の両わきには最後まで花といふものが一つもなかった。排気ガスで花が咲かないのか、ドライバが根こそぎもっていったのだろうか、自動車のガソリンのにおいまでかがされ、昔日の思い出にふけて歩いて

ていると自動車事故に会うかもしれぬ。

帰りは土合よりバスで水上に出て、駅前の食堂にてビールで乾杯し「なめこそば」なるものをたべて、十日町発の急行に乗車し、九時に上野駅に着き解散した。

なお今回の懇親会には事務局の人々も含めて十六名も参加したが、幸い天気にめぐまれ、楽しい懇親会であった。土橋の吾策さんに厚く御礼申し上げる。(野上成勇)

会務報告

六月理事評議員会

(3日午後6時半本会ルーム)

▽出席者 吉沢、深田副会長、中屋、藤井、山崎、川上、野上、松永、神原、宮下、牧野内、熊谷、丹部、芳野各理事、金坂、渡辺氏、織内、折井、村山各評議員、今井監事

▽議事

・各委員会選任の件
別項の通り決定。エベレスト留守本部は一応解散し、エベレスト委員会を復活、本隊帰国後の対策に当ることとなり次の委員を任命した。(委員長)三田幸夫(委員)松方三郎、加藤泰安、村山雅美、大塚博美、松田雄一、藤田佳宏、中島寛、宮下秀樹、藤井連平、山崎安治、川上隆。(担当理事)宮下

・現地支部会議の件
(山崎)六月二十八、九の両日越後支部により、佐渡相川尖閣荘で行なうことに決定。東京からは吉沢副会長と山崎常務理事が出席する。なお二十八日は弥彦山の高頭翁の像の前で日本山岳志賀記念祭を行なう。

・エベレスト登山の件
(宮下)

五月十一、十二の両日松浦植村、平林リチヨタレの二隊が東南稜から登頂に成功、南壁は断念した。また東南稜からの第三、第四次登頂も悪天候のため中止、五月二十一日全員BCに集結、六月二十日ごろ帰国の予定、財政面などの連絡事項を至急知らせようカトマンズに打電した。

・シエルパ同行帰国の件
毎日を通じチヨタレほか一名同行したいむね大隊隊長から要望があったが財政的に無理な面から同伴して帰国しないよう決定、そのむね本隊に打電した。エベレスト学術調査隊の件(藤井)

・一応会の事業としては打ち切り、本隊にもそのむねを連絡、明春電連大の計画としてあらためて考慮する。

・ヒラリー御来日の件 (吉沢)
七月十八日から二十二日まで万博に來日、二十二日から八月三日まで本会が招待、七月二十二日—二十六日は富山支部、二十七日から八月三日まで東京本部で案内する。費用は富山支部、東京本部、毎日新聞で分担、細目は神原理事に一任する。

・上高地山荘の件 (藤井)
高山氏と松本菅林署長を訪問、現在地の裏の台地に改築可能なむね回答を得たので、早急に具体案をねることに決定。

・日大バウダ遠征をラムジュン・ヒマール変更に関する件 (山崎)
ラムジュンの登山許可はむづかしいとの情報もあるが、至急都岳連に手続を取ってもらうことに決定。

・韓国ソウル大文理科大O.B.山岳会来日の件 (神原)
六月に右山岳会が来日するので会としてティーパーティを開催、川上理事と連絡をとること。

・日本学生山岳連盟の件 (芳野)
日山協に全国百十一校の大学山岳部が加盟申請をした。まだ正式に決定し

ないが、本会学生部が主体となり、強力に加盟を推進することに決定。
・山日記一九七一年版の件(牧野内)十一月初旬発行を目的に進める。

昭和四十五年度各委員会名簿

・エベレスト委員会(委員長)三田(委員)松方、加藤、村山、大塚、住吉、松田、藤田、中島(寛)、川上、藤井、山崎、(担当理事)宮下
・学生部指導委員会(委員長)山崎(委員)町、磯、神崎、菅沢、栗林、鹿野、久新、川上、宮下、熊谷、(担当理事)浜野
・指導、研究委員会(委員長)山崎(委員)金坂、村木、川上、川崎、池田、牧野内、錦織、平野、土肥、芳野、堀川、関口、浜野、上田、大森、長尾、広谷、(担当理事)松永
・医療(高所医学)委員会(委員長)辰沼、(委員)住吉、田村、中島、長尾、広谷、三方、原、(担当理事)大森

・図書委員会(委員長)深田、(委員)小林、山崎、大橋、村石、斎藤(桂)、武田(満)、岩淵、萩野、室間、川上(忠)、丸山、松村、(担当理事)野上
・集委員会 平野、西丸、土肥、神崎、渡部(節)、村井(葵)、関田、中川(担当理事)川上
・海外連絡委員会 牧野(文)、近藤(等)、鈴木(郭)、吉沢、堀川、向、関口、袋、田村、丹原、折井、松本、芳野、(担当理事)神原
・婦人懇談会 村井、川森、須田、山口、三枝、斎藤、渡辺、関田、宅間、(担当理事)小倉
・支部連絡委員会(委員長)深田(委員)折井、(担当理事)藤井
・会報編集委員会 吉沢、(担当理事)山崎
・山日記編集委員会 坂本、大貫、水野、吉岡、中村、池戸、(担当理事)

牧野内

・山岳編集委員会(委員長)吉沢、(委員)山崎、芳野、大塚、野上、中島、(担当理事)倉知
・遭難対策委員会(委員長)金坂、(委員)大塚、川上、藤田、広谷、土肥、(担当理事)芳野
・自然保護委員会 深田、村井、島田、渡辺(公)、織内、川森、(担当理事)中屋
・山荘委員会(委員長)折井、(委員)加藤、高山、塚本、(担当理事)藤井

ヒラリー卿来日日程案

七月二十二日(水)大阪発(特急白鳥)八・四〇—富山着十三・一十一
富山市内(車)—JAC山荘—民芸館(知事夫妻とお茶のセレモニー)
—千寿カ原登山研修所十七・三〇(泊)
七月二十三日(木)千寿カ原八・二〇(ケープル)美女平八・三〇—(バス)—室堂十・二〇—雄山十三・〇〇—銀沢研修所前進基地十七・〇〇(泊)
七月二十四日(金)銀沢七・三〇—雷鳥沢九・三〇—室堂十・三〇—(バス)—美女平十一・四五(中食)発十三・三〇—千寿カ原十三・五八(電車)—富山着十四・五〇—(車)小牧十六・〇〇—(船)—大牧温泉十六・四〇(泊)
七月二十五日(土)大牧発九・一五(船)—祖山九・四〇—ダム十二・二〇—下梨—赤尾館(泊)
七月二十六日(日)西赤尾—萩原—御母衣ダム—牧戸—高山
【以上日本山岳会富山支部、同行吉沢一郎、村山行子(通訳)立山には支部から二、三名同行
七月二十七日(月)高山—名古屋—浜松(日本楽器)—館山寺温泉

(泊)または日本楽器の寮

七月二十八日(火)浜松—(車)—河口湖(泊)
七月二十九日(水)富士山—御殿場(奥さん下まわり)—乙女峠—箱根(奈良屋)
七月三十日(木)箱根—東京—JACリセブション—NZ大使館邸泊
七月三十一日(金)NZ大使館リセブション
八月一日(土)西武エベレスト展
八月二日(日)フリー
八月三日(月)羽田発香港經由帰国

婦人懇談会集会報告

五月二十二日(金)最近ネパールへ行って来られた三人を囲んでお話をし、て頂きました。
① P29のスライドとお話(大阪大学山岳会P29連任に同行して) 三枝礼子
今は画学生である三枝さんのスライドはカメラアングルがすばらしく迫力があつた。あと四〇〇mで引返されて残念でした。酸欠と生活のお話も面白く話されました。
② ネパール・ワンデリング(ジヨムタンカルカゴザインクンドルバルバックリルガカ) 関田美智子
三月の中旬から四十日間、女性四名シエルバー一名、ポーター四名のパーティーでワンデリングされた。遠征前と違ってゆったりとした雰囲気、女性隊らしいなごやかなさがあふれていた。
③ インダとネパールの旅 村井米子
学生部の婦人が大勢集られたのでその方々へあちらへの旅のことなどを話された。
六月は二十七日(土)の夕方から二十八日(日)一泊して懇親会を行ない

ます。

七月は日は未定ですが、エベレストから帰られた渡部節子さんのお話の予定です。(婦人懇談会委員 斎藤桂)

ルーム誌(45年5月)

6日(水)理事評議員会
8日(金)全日本学生山岳連盟委員会
15日(金)松方隊長帰国報告並びに打合せ
19日(火)図書委員会
22日(金)婦人懇談会
海外連絡委員会
27日(水)集委員会
五月中来室者三十二名

会員異動

住所変更
一八八 奥野正亥 熊本市新生町六一
一八九 安江安宣 倉敷市住吉町七
一九六 岡川大学農業生物研究所構内宿舎
四〇二 大島輝夫 千葉市黒砂二丁目四一四
四二九 田辺 修 新潟市紫町八一
八 東北電力社宅
四三八三 井上義郎 芦屋市岩園町二八一一三 岩園ハイツ四〇二二
四五四四 藤野欣也 埼玉県北足立郡桶川町寿一三三七
四五八三 堀内章雄 川崎市昭和二丁目五七七八
四七八六 松沢 亨 高岡市広小路二一六六 庄司駒男 宮城県宮城郡泉町市名坂字町六八
四九二二 細井隆司 阿久根市波留六二一八一
五三〇四 竹内通雄 寝屋川市大字三井六五八一 住友海上火災寝屋川社宅一〇二二

五四二四 大貫良夫 名古屋市中区又穂町二ノ一 又穂公園一ノ三一六
五四二二 竹端節次 静岡県駿東郡清水町徳倉 県立沼津商業高校内
五五〇四 大久保慶三 三重県上野市丸ノ内一〇四一
五五〇六 羽賀育子 長野県下高井郡山ノ内町志賀高原 上信越国立公園管理事務所
五七一九 坂下一 杉並区浜田山二一九一〇
五九三六 阿岸充穂 731 North St. Andrews Place, Apt. #212 Los Angeles, California 90038, U.S.A.
六〇四五 今村文彦 富田林市久野喜台一八八六〇五号棟三〇四号室
六二七九 桜井善志 中野区野方二丁目二二四 さつき荘
六三三六 桜田昭嘉 北海道空知郡上砂川町東郷七町内
六六〇三 滝 紘之 川崎市生田一五一六
六六二〇 藤田 孝 千葉市小中台町七六五 稲毛ハイスク一三〇四
六六二一 加藤佳久 岐阜市加納奥平町一五
六七六四 玉井信義 神戸市灘区王子町一丁目王子公園 神戸登山研修所内
六八〇一 愛知教育大学山岳会 刈谷市井ヶ谷町沢一 愛知教育大学化学教室 飯田研究室内
六八〇三 中川広三郎 秋田市牛島町一〇九一一
六八八六 加藤正己 立川市富士見町一丁目四三三
住居表示変更
四一六二 堤 甚五郎 北九州市門司区羽山一〇九一九
四六四五 山口一孝 世田谷区成城一丁目二四一四
六六五九 田上敏行 杉並区荻窪三丁目四三一一三

六七八八 河西邦彦
諏訪市小和田七―五

改姓

六二七九 桜井善志
(旧姓松原)

代表者変更

五四七一 信州大学山
岳会 代表井関芳郎

終身会員

(45・5・20)

四六七八 山崎 徹

物故者

五〇七六 桑原弥寿三
45・4・25逝去

二〇三 河合良成 45
・5・14逝去

五二〇四 中田清兵衛
45・5・26逝去

会員名簿訂正

七八ページ 新妻 徹
の電話番号(023)

517888 と訂正

一〇二ページ 三木正
一の電話番号(046)

240147 と訂正

第二五九回小集会

第二五九回小集会は
現地小集会とし、山梨

支部と共催で五月十七

十八の両日山梨県金山

平の本喜理太郎翁碑前

で「第八回木暮翁碑前

懇親会」を開催した。

終わって金峰山、みず

かき山などへの記念山

行を行なった。

第二六〇回小集会

第二六〇回小集会は

六月十日午後六時半か

ら本会ルームで、会員

薬師義美氏の「グルジ

ヤ・ヒマール登頂の記録」を行ない盛
会であった。

第二十四回ウェストン祭

恒例のウェストン祭は、ことしで第
二十四回を迎え、六月六日、七日の両
日、新緑の上高地ウェストン・リレー
フ前で行なった。

海外連絡委員会

(5月22日午後6時本会ルーム)

▽出席者吉沢、折井、堀川、鈴木、関

口、牧野、神原(担当)

・本年度委員に近藤、折井、牧野、芳

野、関口、鈴木、堀川の各昨年度メン

バーのほか、吉沢、丹部および在外の

田村氏にも依頼。新地区メンバーとし

て袋一平(ソ連担当)向一陽(南米担

当)松本義夫(アフリカ担当)の諸氏

を決定した。

・今後の活動方針

従来は海外からの来訪、来訪者のお

世話など受け身であったが、今後はJ

AC紹介の英文パンフレットの作成、

外人登山者で日本の山に登りにくる人

との事前の連絡など積極的に行ないた

い。

・韓国ソウル大十七名が六月に来日す

るので会としてティーパーティを開催

するよう理事会にはかる。

・シエラクラブのクラーク氏来日の件

九月に来日するので関係者と連絡す

る。

・マライニ氏イタリア山岳会誌にJ A

C紹介記事の件

山崎理事と連絡する。

・ヒラリー夫妻来日の件

訪日中華登山隊歓迎会

昨年十月台湾省山岳協会を中心とし

て、中華全国山岳委員会が新しく発足

し、同委員会の訪日登山団として周百

ガストンの山岳書店

店主・L.C.ボーム(英国山岳会員)

登山、極地に関する各国の新刊、旧刊、絶版も
の取次ぎ販売。各国山岳会年報、月報、登山案
内書、特殊地図、版画なども取扱っております。
型録その他のご照会、お申込みをお待ちして
おります。

宛 名 “GASTON'S ALPINE BOOKS”
134 Kenton Road, Harrow Middlesex,
HA3. 8AL. England
(なお、JAC, AC, AAC, ACCの会員、Mr.)
(Ichiro Yoshizawa は、私の親しい友人です。)

練氏ら十五名が来日したので、五月九
日午後六時から千駄ヶ谷日本青年館で
訪日登山団歓迎会を開催した。

あとがき エベレスト隊も全員無事

帰国した。本当にご苦労さまでした。

六月二十日はちょうど六義園で有志関

談会があり、その世話役をつとめたり

でつてこまい。今月号は別冊索引を

作つたため八ページにした。(山崎)

昭和四十五年七月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二二三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 山崎 安治

(293) 七四四一

振替口座東京四八二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也
送 料 別 受 け 金120円也

中林製本手帳株式会社

東京店・文京区水道2~15、電話(943) 0311 (代表)
大阪店・都島区相生町7、電話(352) 3491 (代表)
名古屋店・昭和区雪見町1~15、電話(731) 7331 (代表)
工場：大阪工場(堺市)、東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

角筈支部(専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話(352) 1556・1557

